

命どう宝

糸満市立高嶺中学校三年 池村 俐音

一九四一年十二月、日本が真珠湾を攻撃し始まった戦争。ここ沖縄の地でも多くの人々の命が失われてしまった。戦争は人の気持ちを完全に麻痺させてしまった。

私の祖父は、戦争体験者です。祖父は、父を戦争で亡くしています。祖父は三歳で戦争を体験しています。祖父は、私が幼かった頃、戦争については語ることはありませんでした。しかし今では、戦争の話を何度ももてくれます。私は祖父の話を聞くだけでも、毎回、心にずっしりと重く感じるばかりです。戦争が本当に、この沖縄であったかと思うとゾッとします。信じられないことばかりです。祖父は、三歳という幼児だが、今でもはつきりと脳裏に焼きついている光景。それは池や川の水が真っ赤に染まっていたこと。血の海で、人の死体が浮いていたこと。水がないので仕方なく、その赤い水を使って米を炊いていたことです。私は祖父の言葉に、何度も耳を疑いました。夜は暗く、地面にあるたくさんの死体を踏みながら歩いていました。祖父は、人の死体を見て何を思ったのだろうか。人を踏み、前を歩かなければならない祖父は、きっと悲痛な思いだったろう。

身を潜めるために、お墓を開けてお墓の中に、隠れたそうです。果たして今の私に、できるのだろうか。身の毛がよだつ思いです。隠れている時も、赤ちゃんは次々に母親の手で殺されたそうです。それは赤ちゃんの泣き声がお墓の外にいる米軍にバレてしまうからです。我が子を殺してしまう、母親の気持ちのことを考えると、私は自然に涙が出てきました。人が人でなくなる。残虐な行為。また、子供達と一緒に出て行って殺され、多くの命が奪われていきました。日本兵は、お墓に沖縄の人が隠れていたのを追い出して、自分達の隠れ家にしたそうです。首を撃たれても必死に歩いて逃げ迷う人、祖父の瞳に映る光景は、この世ではなかったと話してくれました。軍人に無残に殺されるよりは、自分で死んだ方がいいと言い、壕の中で手榴弾で集団自決をする人もたくさんいたそうです。死を追い詰められ、自ら命を絶った人々。私の住んでいる

糸満市摩文仁では、追いつめられた人々が、次々と海へ身を投げ、命を落としたそうです。

糸満市摩文仁の平和祈念公園に、今でも私は何回か訪れています。学校の平和学習でも平和について学び、平和祈念資料館へも行きました。資料館には、戦争の時の写真が展示されています。資料館の写真は、衝撃的すぎて今でも鮮明に覚えています。戦争体験者の体験談もあり、その時見た文章も記憶に残っています。戦争体験者の体験談は私の心に重く刻まれています。

戦後七十六年を経ても、沖縄では戦争の爪痕が残っています。遺留品や不発弾が見つかります。祖父が小さい頃、子どもながらに、火薬に火をつけて遊んだり、不発弾を投げて亡くなった子もいたらしいです。

そして、七十六年経った現在でも、戦争の時の遺骨が発見されています。私は祖父から話を聞いたり、戦争の事を勉強することで、命の有り難さを実感することができました。戦争で祖父が生き残っていないなら、母もいないし私もいない。自分が産まれていなかったと思うと、命こそ宝。命が歴史をつないでいくのだと。祖父の経験した命の重さを私は、しっかりと後世につないでいきます。戦後から76年がたった今、この太平洋戦争で多くの人々が犠牲になった悲しい出来事が、薄れていかないように、語り継いでいきます。

命どう宝。忘れてはいけない。風化させてはいけないのだ。今日も燦々と太陽が輝いている。月桃の花が咲き、生温かい風が大地を吹き抜けていく。私は、雲一つない青空を見上げた。ずっとずっと澄んだ空に吸いこまれそうになった。きっと77年前も同じ光景があったに違いない。